

重量木骨の家

『Kさんとこのうち』プランニングコンセプト

その1、お日様の光がほしくて...

南側に中央自動車道の防音壁。

それが出発点でした。土地探しの条件は『駅から徒歩15分圏内』だったのですが、当然のことながら価格も飛びきりです。そんな中で、この土地を見つけたのですが、防音壁を見たときはずいぶん迷いました。

しかし、何度も足を運んでみると、防音壁の真横なだけに音については予想に反して静かなことが分かりました。

そこで問題になったのが、その防音壁の高さです。5mという高さが南にはだかるとはっきり言って考え物です。で、考えました。じゃあ、その上から入るお日様の光を取り入れようと。

そこで、防音壁の日影図を描きました。条件は冬至。この最悪の条件でも2階には8時過ぎにはしっかり日が入ることが解りました。

考えてみれば、南にはこれ以上大きな障害物ができることはありません。そして、SE構法でしか難しい、南面全面の大きな窓を設けることになったのです。

その2、やっぱ、吹抜でしょ...

そうすると、必然的に2階に早くから入るお日様の光を1階に取り入れる工夫をしなければいけません。そこで、リビング上部に大きな吹抜を造ることで早くから差し込む光を取り入れることにしたのです。

その3、イメージは、『風とともに去りぬ』...

大きなリビングの吹抜に、階段があり、2階のホールから見下ろす。古き良きアメリカのイメージをコンパクトにまとめてみました。

でも、あくまでも現代風に。

その4、木の家がいい...

昨今、シックハウスも問題が毎日のように騒がれていますが、ホルムアルデヒド放散量を気にするより、放散しないものを使っちゃってことで、内壁はほとんどを杉板張りにしました。

そして、『重量木骨の家』であるために、当然のことながら構造材はあらわしとし、SERパネル(断熱屋根パネル)を表しとし、省施工とデザイン性を両立しました。

その5、SE構法じゃないと...

スケルトン&インフィル。『重量木骨の家』はこの考え方で成り立っていますが、この家のプランニングも基本は同じです。グリットプランを良く見ると、スケルト

ン(構造)の状態では在来工法では難しい、かなりの大空間が取れるように計画してあります。インフィル(内装・設備)は自由な位置で間仕切ることができるので、あ～でもない、こ～でもないと思いをめぐらせながら、理想の家を造る事ができます。また、1階と2階のバランスも自由が利くので、「こんなところに壁ができちゃうの」って言う心配もありません。

その6、決め手は外断熱...

SE 構法は耐力壁に構造用合板を使用しますが、これと非常に相性がいいのが ND システム外断熱です。外断熱は断熱性はもとより、壁体内結露の発生を抑えるため、家の寿命を延ばすのはもちろん、SE 構法で作り上げた大空間を囲む壁の厚みの中も断熱材が無い場合、有効に活用できます。

SE 構法+ND システム。究極の組み合わせです。

その7、平面プラン

面積を少しでも抑えるために常識にとらわれない間取りとしました。

動線を考えてプランニング。例えばキッチンは面積が犠牲になる対面式を避け、且つ、作ったものをすばやく食卓に置けるよう、固定式テーブルを横に並べました。システムキッチンはどうしても欲しかったトーヨーキッチン製ですが、価格が高いので対面側の家電収納ハッチは他メーカー(ミカド)の物でコストダウン。扉色は赤(トーヨー)と青(ミカド)の対比で異メーカーを調和させました。

リビングの角、棟まで通る柱を 170 角の通し柱として、大黒柱的な存在感と SE 構法らしさを強調。

階段はササラと手摺を鉄骨としてシャープさを演出し、ストリップ階段で空間をアピール。

吹抜の梁は床荷重を仮定して計算してあるので、将来的に部屋を作ることも可能。

和室は現代風にアレンジ。どこかに茶室を匂わせました。

浴室は広さを最優先にしました。

洗面と脱衣を別にし、動線のバッティングを回避。

寝室のイメージはリゾートホテルの 1 室です。吹抜からリビングを見下ろす窓を付けました。

その8、外観

テーマは南プロバンス風。カラシ色の外壁にスペイン風瓦混ぜ葺きの屋根を合わせて爽やかな雰囲気になりました。

玄関は洋風ながら引戸にこだわりました。

南面は欄間通しのハイサッシとして、お日様の光を受け入れます。

バルコニーは、同じ面積でも長さより奥行きを優先して配置、風と仲良くなるように格子手摺としました。

屋根は棟違いとして単調になりやすい大屋根に変化を付けました。

北道路、北玄関で北よりの建物なので玄関前が窮屈になりがちですが、東からの細長いアプローチで奥行きのあるエントランスを演出しました。

以上が『Kさんとこのうち』プランニングにあたり、考慮した点ですが、一番の思い出は、人の創らないもの、そして『作品』として創り上げることをです。